赤ちゃんがブタに変わるとき
—『不思議の国のアリス』小論—

When a Baby Changes into a Pig : A Short Essay on *Alice's Adventures in Wonderland*

松　村　聡　子
MATSUMURA Satoko

ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) では，主人公のアリスは地下の不思議な世界で何度も身体の大きさを変化させながら，様々な人物や動物と出会い，いろいろな体験をする。本稿はその中でも作品のほぼ中央に位置する第6章で，公爵夫人からアリスに預けられた赤ちゃんが次第にブタに変わっていく場面に焦点を当てて考察したい。その前の章でアリスは，芋虫からキノコの「いっぽうの側は背が高くなる，反対側は背が低くなる」[1] と教わり，それまでは自らの意のままにならなかった身体のサイズをコントロールする術を得て，なんとか目指していた元のサイズに戻ることができた。ところが，せっかく元の大きさに戻れたにもかかわらず，アリスは第５章の末尾で公爵夫人の小さな家に入るため，再び身体を9インチにまで縮めてしまう。続く第６章において，家の中に入ったアリスは，公爵夫人が混沌とした台所で赤ちゃんをあやしているところに出くわす。調理されているスープのコショウが多すぎてくしゃみが止まらない中，手当たり次第にものを投げつけてくる料理人の攻撃を避けるために，アリスは公爵夫人から放り投げるように手渡された赤ちゃんを連れて外へ出るが，次第に抱いている赤ちゃんがブタのような気がしてくる。そして，赤ちゃんが完全にブタに変わったと分かったとき，アリスは抱いていたブタを手放し，ブタはそのまま森の中に消えて行く，というのがこのエピソードの大まかな内容である。公爵夫人の台所でアリスが出会った赤ちゃん以外の登場人物，すなわち公爵夫人や料理人，それにチェシャネコはこのあと再登場する場面があるのに対して，このブタに変わった赤ちゃんはこのまま作品世界からも消え失せ，二度と言及されることがない。公爵夫人は，クロッケーの試合でアリスと再会したときも，「ブタにだって飛ぶ権利があるようにね」(81) と，ことわざを引き合いに出してわざわざ「ブタ」という単語を発するにもかかわらず，赤ちゃんのことを思い出してアリスに聞く気配すら見せない。まるでその存在すらすっかり忘れてしまったかのようである。批評においても，頻繁に取り上げられる公爵夫人やチェシャネコに比べて，このブタに変身した赤ちゃんが論じられる機会は，はるかに少ないように思われる。しかし，それはこのエピソードが重要でないことを意味するのではない。なぜなら，『不思議の国のアリス』において，身体上の変化を経験するのは，アリスとこの赤ちゃんだけだからである。もっとも，両者の変化の仕方は全く同じというわけではない。というのも，アリスの変化が主に身体の大きさだけに関わるものであるのに対して，この赤ちゃんはまったく別の生き物へと変わってしまうのだ。また，アリスは身体の全体，もしくは一部が伸び縮みを繰り返すのに対して，赤ちゃんの方はひとたびブタになってしまうと，森の中へと歩み去り，再び人間に戻る可能性はほとんど感じられない。そこで本稿では，こうした人間の赤ちゃんからブタへの変身がそれ自体として，そして作品の展開上どのような意味があるのかを，他の場面とも関連づけながら考えていきたい。

アリスの身体の大きさの変化は，彼女のアイデンティティの不安に関わるとしばしば指摘されている。例えば，千森幹子はアリスの身体の伸び縮みは，「子ども時代に子どもたちが経験する『アイデンティティの危機』へのメタファーとも考えられる」と指摘し，さらにアリスが最後に現実の世界に戻ってくることで「その危機を乗り超え」て，彼女が「物事に冷静に対処できる『賢い子ども』として新たな自信をえ」たのだとしている (45)。地下に広がる不思議の国で，身体の大きさが変わって周囲の状況に適応できなくなったアリスは，すっかり混乱して自分が誰なのかはっきりと同定できなくなってしまう。「今朝起きたときは，いつものわたしだったかな？なんかちょっとちがう感じがしたような気もするんだけど」(18) と不安に思い始めると，彼女は同い年の少女を次々と思い出しては，自らを弁別しようと試みる。けれども，「エイダってことはないわ」とか「メイベルってこともありえない」(18) と否定によって自らを規定することはできても，アリスは自分が誰なのかという問いに直截に答えられなくなってしまう。その結果，彼女は白ウサギから使用人のメアリ・アンと間違われて用事を言いつけられても，驚きのあまり反論することなくその指示に従ってしまう。それでもこのとき，ウサギに指図されることを変だと感じたアリスは，指示通りに行動しながらも，次は飼いネコのダイナにお使いに出されるようになるのではと考え，頭の中でその場面を以下のように思い描く。

> ‘“Miss Alice! Come here directly, and get ready for your walk!” “Coming in a minute, nurse! But I've got to watch this mouse-hole till Dinah comes back, and see that the mouse doesn't get out.” Only I don't think,’ Alice went on, ‘that they'd let Dinah stop in the house if it began ordering people about like that!’ (32)

引用の最初の部分で，アリスは乳母から本来の彼女自身の名前で呼ばれ，散歩の日課に出かけることを想定していて，「いつものわたし」を思い出したように見える。しかし，これで彼女のアイデンティティが回復したとは言えないだろう。むしろこの想像の中でネコのダイナの代理としてネズミ穴を見張っているアリスは，自らとダイナを重ねあわせて同一化させているように思われる (Auerbach 36)。『不思議の国のアリス』の中で，ダイナはネズミをはじめとした小動物の狩りに秀でた捕食者として常にアリスにイメージされ，小動物たちから怖がられ恐れられる存在である。だが，アリスの想像はここで終わらず，そこからさらに，その気になればダイナを家から追い出すこともできる，強者ダイナよりもさらに強力な飼い主一家としての立場に同一化の対象を転換させる。白ウサギから思いもかけず使用人として扱われたアリスは，まずダイナへ，そして飼い主一家へと，自身をより強い者と同一視していき，強者の側に立ち位置を確保しようとすることで，自らの優位性を保とうとしているのかもしれない。もちろん，同一化の対象をめまぐるしく変化させるこの想像自体に，アリスのアイデンティティの混乱が見られることは言うまでもない。

アリスの身体サイズの変化は，主に何かを食べたり飲んだりすることを契機として生じており，アイデンティティの危機と飲食することや捕食/被食の関係については，すでに多くの先行研究があるためこの小論での詳述は避けるが，アリスがこの捕食/被食のパラダイムの中で常に捕食者と同一化して優位を保てたわけではないということだけ指摘しておきたい。地下の世界に実際に降りてくることはないものの，捕食者であり強者として小動物たちを恐れさせるダイナですら，すでにウサギ穴を落ちていくアリスの想念の中で「ネコってコウモリ食べる？ (“Do cats eat bats?”)」という文がときに「コウモリってネコ食べる？ (“Do bats eat cats?”)」となることで (11)，被食者にもなりうる可能性が示唆されていた。不思議の国ではアリス自身も捕食/被食の網の目の中に絡め捕られていく。海ガメモドキにタラのことを聞かれて，晩御飯で食べたことがあると危うく口にしかける一方で，白ウサギの家で身体が大きくなり身動きが取れなくなったアリスは，家ごと丸焼きにされそうな目にあ

うし，身体のサイズを小さくしてどうにかその家を脱出したあとは，巨大な子犬に出会って，「どんなにやさしくしても，ぱくりと食べられて」しまいかねないという恐怖を体験する (38)。この不安定な捕食/被食関係はアイデンティティの不安に直結するのである。

アリス自身も被食者になる可能性があるという不安を別の角度から示すものが，ブタに変わる赤ちゃんのエピソードではないだろうか。アリスがこの赤ちゃんを初めて目にするのが，公爵夫人の台所であり，そこでは料理人によってスープが調理されていた。ローズ・ラヴェル＝スミス (Rose Lovell-Smith) も指摘するように，ブタは最も身近な可食動物のひとつである。そもそもこのエピソードが登場する第6章の章題が「ブタとコショウ」と，料理を連想させるのも，捕食/被食関係に伴う不安感とあながち無関係とは言えないだろう (Lovell-Smith 40)。

さて，公爵夫人にしろ，料理人にしろ，そしてこのあと登場してくるハートの女王様にしろ，『不思議の国のアリス』に登場する大人の女性たちは，こぞって攻撃的で不愉快な存在である。盗まれたタルトをめぐって裁判を起こすハートの女王様は，食物に対して強い執着を見せると言える。また，台所に鎮座し，第 9 章ではクロッケーのクラブとなったフラミンゴが「かみつく (“bite”)」かもしれないと警告したアリスの言葉を，芥子が「ヒリヒリする (“bite”)」(80) と意味をすり替えようとした公爵夫人も，食物に対する関心や食欲を女王様とある程度共有していると言えそうである (Garland 28, 30)。[2] ことあるごとに「首を切れ！」と強権的な態度を取るハートの女王様は，臣下ばかりでなくハートの王様やアリスに対しても権威を振りかざして威圧しようとする。食欲は権力欲につながるのだ。高圧的で傲岸不遜な大人の女性に対して影が薄く無力な男性という構図は，そのまま公爵夫人と男児である赤ちゃんにも適用できる。そもそもこの赤ちゃんがブタへと変身する直接の契機となったのは，公爵夫人が「ブタ！」と突然乱暴に呼びかけたことにある。赤ちゃんは公爵夫人のことば通りに姿を変えていくのだ。

> ‘Please would you tell me,’ said Alice, a little timidly, for she was not quite sure whether it was good manners for her to speak first, ‘why your cat grins like that?’
>
> ‘It's a Cheshire-Cat,’ said the Duchess, ‘and that's why. Pig!’
>
> She said the last word with such sudden violence that Alice quite jumped; but she saw in another moment that it was addressed to the baby, and not to her, so she took courage, and went on again:— (53)

安井泉は，『不思議の国のアリス』，および『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1872) のいわゆるアリス本の世界は「ことばがまず創られ意味は後から考え出されるという逆進の創造の世界」(114) だと述べているが，この人間の赤ちゃんからブタへの変身も，ことばが発せられたために実体がそれに合わせて変わっていくという，作品内に散りばめられた数ある例のひとつだと言うことができる。さらには，料理人が投げつけるフライパンや皿などによって「大事なお鼻 (“his *precious* nose”)」(54) が取れてしまうと心配するアリスのことばも，赤ちゃんがブタの特徴的な鼻へと変化していく先触れになっていると言えるだろう。だが，それよりもここで注目したいのは，「ブタ！」と公爵夫人が叫んだとき，呼びかけられたのは自分ではないのかとアリスが驚くことである。一瞬とはいえ，アリスが可食動物のブタへと変わっていく赤ちゃんと自身とを混同する。食べる側の人間と，食べられる側のブタとの境界が揺らいで，捕食/被食の二項対立が瓦解していく過程にアリスも巻き込まれるのである。実際，アリスは直後に公爵夫人から「この子の首を切っておしまい！」(54) と言われて，恐る恐る料理人の方を見やることになる。まるで自

身がスープの具材にされてしまうのではないかとでもいうように。[3] これによってアリスは大人の女性に抑圧される弱い立場の男性――作者のキャロル自身と言い換えてもいいかもしれない――の側に身を置くとともに，常に食べる側にいた人間としての優位性の揺らぎを再認識することにもなるのである。

ところで，赤ちゃんがブタに変わるエピソードの前に置かれた第５章では，アリスと芋虫との会話の場面があり，そこでは芋虫の変態が話題となっている。芋虫からお前は誰だと尋ねられてもまともな返事ができず，アリスのアイデンティティが揺らいでいるのが明白に示されている場面である。自らに違和感を覚えるアリスは，芋虫がやがてはさなぎに，そして蝶へと姿を変えることを念頭に置きつつ，そのように形態が変わることで「変な感じ」がするのではないかと問いかける。これに対して芋虫は「ちっとも」と即座に素っ気なく否定する (41)。芋虫にとっての変態は成熟するための自然の流れであり，自らの意思や希望で変態を遅らせたり進めたりできるものではないし，さなぎや蝶の状態から芋虫の状態に戻れるわけでもない。アリスのようにその場の状況に合わせて身体の大きさを変化させたいと希望し，急激な伸び縮みを繰り返すのとは全くの別物である。にもかかわらず，芋虫のそれぞれの成長の段階は，人間によって区別され，「芋虫 (“caterpillar”)」，「さなぎ (“chrysalis”)」，「蝶 (“butterfly”)」と別々の名前が与えられている。アリスが芋虫に違和感を問うているのもそのためであると考えられる。つまり，芋虫のそれぞれの段階は，観察する側にいる人間の視点で，あたかも別物であるかのように分類されて名づけられているのである。

芋虫との場面に続いて，アリスがハトからヘビだと決めつけられるエピソードが描かれる。ハトは，「空からくねくね降りてくる」ことと卵を食べるという属性を備えたアリスをヘビと同一視し，アリスが「女の子です」と訴えても聞く耳を持たない (48)。ここでは，首の形態や状態を観察してヘビの仲間に分類するという，現実世界では人間が行っている役を担っているのは，アリスではなくハトの方である。ラヴェル＝スミスは，アリスの「でも，わたしは今は卵を探してないし，探していたとしても，あなたの卵はほしくないわ。生卵はきらいなの」(48) という発言に，彼女の人間としての優位性の主張を見ている。つまり，人間たるアリスは，他の動物たちのように卵を生で食べるのは嫌いで，文明の証である調理した卵が好きなのだ，というわけである（Lovell-Smith 39)。アリスがハトによってヘビと分類されることに抵抗し，人間としての――彼女自身の言い方を借りるなら「女の子」としての――アイデンティティを必死で繋ぎとめようとしているのだと言うことができる。

『鏡の国のアリス』では，ハンプティ・ダンプティが身につけているものがベルトなのかクラヴァットなのかについて，アリスが迷う場面がある。アリスにとっては，ハンプティ・ダンプティの身体の「どこが首で，どこが腰なのか！」(189) という点が判断できないと，身体に巻かれたものがベルトなのかクラヴァットなのかが分からない。しかし，ハンプティ・ダンプティの卵型の体型では，その区別ができないため，結局その身体に巻きつけられたものが何であるのかは，すっかり機嫌を損ねたハンプティ・ダンプティ自身がクラヴァットだと説明するまで，アリスには全く判別できないままである。ここではあるものを適切な名前で呼ぶためには，それを別のものと区別して判断を下す必要があることが示されていると同時に，別のものとしてあらかじめ名前がつけられていても，状況によってはその識別が非常に困難であるということも示されているのだ。それでは，赤ちゃんからブタへの変化はどうなっているのだろうか。芋虫の変態とは違って，赤ちゃんからブタへと変化する途中段階は名づけようがない。[4] キャロルは，その変化の様子がいかに微妙であるのかを，赤ちゃんと豚の泣き/鳴き声を表す動詞の変化で示しているように思われる。まず，赤ちゃんがアリスに託されたときの泣き/鳴き声は，“snort” という動詞によって表現されている。『オックスフォード英語辞典』（*Oxford English Dictionary*，以下*OED*と略記）によると，“snort” は「馬やその他の動物が鼻腔

から強く息を吐き出すときにたてる大きな音」であるとともに「軽蔑や蔑み，その他の感情を表現するのに人間が出す似たような音」でもある。つまり，動物と人間のどちらにも適用可能な語であるが，この語が喚起する代表的な動物のイメージは馬であるということになる。それが“grunt”へと変わっていく。*OED*では「ブタによる特徴的な低くしわがれた鳴き声，または他の動物によって出される同様の声」であり，「人間によって出される同様の声。肯定を表すこともあれば否定を表すこともある」と定義されている。つまり，“grunt”も“snort”同様，動物にも人間にも適用できるが，“snort”から“grunt”へと動詞が変わることによって，ブタのイメージが前面に出て，アリスの腕の中の代物がよりブタに近づいていることを示しているのである。

さて，公爵夫人から赤ちゃんを託されたものの，なかなか上手く抱きとめられないアリスは独特の抱き方を編み出すが，そのやり方は一風変わっている。「結び目を作るみたいに赤んぼうをねじったうえで，右耳と左足をしっかりおさえてほどけないようにしておく」(55) という，抱かれる側にとっては恐ろしく居心地の悪そうな方法である。[5] しかしこのように不自然とも言えるやり方で身体をねじって拘束することよって，アリスは上述したような赤ちゃんの声の微妙な変化に気がついたとき，赤ちゃんの目に涙が残っているかどうかといった，コショウだらけの公爵夫人の台所にいたままではかなわなかったような細かな点も，容易に観察することができるようになるのである。

ヴィクトリア朝の博物学のブームと，博物学の本の挿絵にしばしば取り上げられた「卵泥棒のモチーフ (“egg-thief motif”)」との関連で『不思議の国のアリス』の考察を展開するラヴェル＝スミスは，アリスがヘビだとされたように別の何かとして把握される点を，あらゆる自然現象を観察して読み解き，分類して名づける博物学のパロディとみなしている。すなわち，第 5 章の後半部でハトがアリスをヘビだと主張することは，名づける側の人間と，名づけられる側の生き物との主客の関係が逆転していることを意味し，今やアリスは分類し名づける主体から分類され名づけられる客体へと転換されているというのだ (Lovell-Smith 39)。だとすれば，芋虫から身体の大きさをコントロールする術を教わって，少しずつ自信を取り戻し始めたアリスが，託された赤ちゃんを人間の子かブタの子か見極めようとするのは，客体化された彼女が再び主体へと回帰しようとする行為だと考えることができるのではないだろうか。バタバタと手足を動かしたり突っ張ったりして抵抗しようとしていた赤ちゃんの身体を，アリス自身にとって都合の良いようにねじり動かないように抱きとめるというやり方は，蝶や昆虫の羽や肢を広げて形を整えピンでとめる標本作りを連想させる。そのように拘束した赤ちゃんの不自然な泣き/鳴き方に気づいたアリスは，実際，視線を赤ちゃんの顔に落とすことによって，その様子をつぶさに観察しようとしている。このときアリスが赤ちゃんをあやしながらしていることは，腕の中の代物が人間なのかブタなのかをよく観察してどちらかに分類しようとする行為に他ならない。だからこそ，彼女はその生き物が人間とブタのどちらなのかはっきりするまで手放そうとせず，「どこから見てもブタ」(56) と判別できて初めて世話をするのをやめるのである。つまりアリスは，観察し，分類し，判別するという行為を通じて人間として，ひいては己としての主体性を取り戻していくのだ。[6] これ以降，作品の中でアリスが他の人物や他の動物に間違えられることはない。赤ちゃんがブタに変わる場面の後でアリスが出会う帽子屋やハートの女王様は，アリスに呼びかけるのに“child”や“young lady”という言い方を用い，アリスを人間の女の子ではない別の何かとしてとらえることはない。さらに，ハートの女王様に「名前は，なんというのか，そこの子ども？」(71) と問いかけられたときは，アリスは迷うことなく自分の名前を答えているのだ。

ウサギ穴を落ちて行った先の不思議の国で，アリスは捕食/被食関係の不安定さを経験し，自分が誰なのかというアイデンティティの危機に直面した。赤ちゃんがブタに変わるエピソードは，アリスが赤ちゃんと自らを混同することによって，捕食/被食の関係が不安定さを孕んでいることを彼女に

再認識させるとともに，他者から観察され規定される作品の前半部から，観察する行為者としての後半部へと彼女の立場の変換を決定づける。観察を通じて対象物が何に分類できるのかを判別していくことで，動物たちに立場を規定される側から，動物たちを規定する側へとアリスが主体性を回復し，アイデンティティの危機を乗り超えていく重要な転回点となるのが，この赤ちゃんがブタに変身する場面なのである。

注

1 Carroll 46.『不思議の国のアリス』からの引用は，すべてオックスフォード版によっており，以後引用ページ数は，括弧に入れて本文中に示す。なお，『不思議の国のアリス』および『鏡の国のアリス』の引用部分の日本語訳については，いずれも河合祥一郎訳を使用させていただいた。

2 『不思議の国のアリス』の前身である『地下の国のアリス』(*Alice's Adventures under Ground*) では，公爵夫人とハートの女王様は同一人物であった。『地下の国のアリス』と『不思議の国のアリス』の異同については『ルイス・キャロル ハンドブック――アリスの不思議な世界――』が要領よく解説してくれている (安井 48-50)。カリナ・ガーランド (Carina Garland) はヴァギナ・デンタータの概念を援用して，ハートの女王様や公爵夫人などの攻撃的な女性をセクシュアリティの観点からも論じている。さらに彼女は，『不思議の国のアリス』においてアリスの飲食の行為は食欲と切り離されており，そのことによって少女としての清純さが保たれているのだとも述べている (28)。なお，ガーランドは公爵夫人と食物の強い関連を示す根拠として「お酢だとすっぱい顔になるし――カモミールだと苦い顔になるし――それに――それに，キャンディーとかそういうものだと子どもは気だてがよくなるわ」という第9章の冒頭近くにある発言を挙げているが (30)，これは実際には公爵夫人ではなく，アリスのせりふである。

3 ニナ・アウエルバッハ (Nina Auerbach) はやたらと物を投げつける凶暴な料理人は，食べることが殺すことに等しいものであることを体現した存在だと指摘している (38)。

4 宗宮喜代子は，古典論理学者としてのキャロルという観点から，この赤ちゃんからブタに変化していく名づけようのない段階を「排中律に逆らった存在」と説明し (48)，「キャロルはナンセンスを装いながら，排中律が抽象的な理論の中でのみ有効な法則であることを読者に訴えている」(49) と指摘している。

5 高山宏は，姉妹の多い環境で育ち男子生徒ばかりのパブリックスクールに馴染めなかったキャロルの生い立ちから，彼の「少年に対する憎悪」(25) の例として，この男児の赤ちゃんがブタに変わっていくエピソードを挙げているが，身体が妙にねじれた状態で赤ちゃんを拘束するアリスの抱き方にも，こうしたキャロルの少年嫌いを読み込むことが可能であろう。アウエルバッハも，少年たちの醜悪さと不潔さに対するキャロルの恐怖症に言及している (32)。

6 安井はこの場面について，アリスが「それまでと異なり，周りに振り回されるのではなく，自分で自分がなにを成すべきか，どう行動したら良いかを判断して，躊躇することなくそれを実行」すると述べている (46-47)。本稿では，安井の主張に加えて，判断して行動するための観察の重要性を強調したい。

引用文献

Auerbach, Nina. “Alice and Wonderland: A Curious Child.” *Victorian Studies* 18 (1973): 31-47.

Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland* and *Through the Looking Glass and What Alice Found There*. Ed. Peter Hunt. Oxford: Oxford UP, 2009.

Garland, Carina. “Curious Appetites: Food, Desire, Gender and Subjectivity in Lewis Carroll's Alice Texts.” *The Lion and the Unicorn* 32 (2008): 22-39.

Lovell-Smith, Rose. “Eggs and Serpents: Natural History Reference in Lewis Carroll's Scene of Alice and the Pigeon.” *Children's Literature* 35 (2007): 27-53.

Oxford English Dictionary. 2nd ed. on CD-ROM ver.4.0. Oxford UP, 2009.

キャロル，ルイス.『不思議の国のアリス』 河合祥一郎訳. 東京: 角川書店 2010.

---. 『鏡の国のアリス』 河合祥一郎訳. 東京: 角川書店, 2010.
宗宮喜代子. 『ルイス・キャロルの意味論』東京: 大修館書店, 2001.
高山宏. 『アリス狩り』東京: 青土社, 1981.
千森幹子. 『表象のアリス――テキストと図像に見る日本とイギリス――』東京: 法政大学出版局, 2015.
安井泉編著. 『ルイス・キャロル ハンドブック――アリスの不思議な世界――』東京: 七つ森書館, 2013.